

格調高いプラハの文化とエネルギー

これほど世間から羨望の眼で見られる都市はそうあるものではない。曰く「百塔の街」「黄金の町」「石の町」「北のローマ」「魅惑のプラハ」「中世の宝石箱」等々この呼称を見ればどれもだけ魅力のある都市であるかがお分かりいただけるであろう。

プラハには中世ヨーロッパ史の礎を築いた華やかな栄光が秘められている。14世紀には神聖ローマ帝国の首都となり、ローマやコンスタンチヌーブルと並んで中世ヨーロッパ最大の都であった。市内にはモルダウ川(ヴルタヴァ川)が貫流し、現存するヨーロッパ最古の石橋・カレル橋から遠望するプラハ城と中世の重厚な町並みは落ち着いた佇まいを醸し出し、今では世界中の観光客を魅了し、プラハの人びとの誇りともなっている。

30年前の冬初めてプラハを訪れた時、街には深々と雪が降っていた。人通りの少なくなった薄暗い中で頭巾を被り連れ立って歩く老婆と子どもの姿が、ふとアンデルセンの童話「マッチ売りの少女」の侘しい民話の世界を思い起こさせてくれた。

石畳の狭い道路を音を軋ませながら走る路面電車、プラハ城の一角で今でも灯されるガス灯、由緒ある石造りの建物群が懐かしくもノスタルジアを呼び覚ましてくれる。どこから見ても絵になる世界遺産・プラハ歴史地区の街頭風景である。

チェコの人びとの強い自由への渴望から「プラハの春」の勃興とソ連軍による鎮圧が世界中の耳目を集めた中心は、1968年8月のパーツラフ広場だった。社会主義体制の崩壊はまさにこの時からひたひたと押し寄せていたのである。その余波をかぶり1988年8月の滞在中に「プラハの春」20周年記念のデモに巻き込まれてしまった。パーツラフ広場前の滞在中のホテルから禁足令を申し渡され、銃声とシュプレヒコールが交錯する騒音に、いらいらしながら夜通し外を眺めていたことが懐かしく思い出されてくる。

1989年ビロード革命を経て自由を取り戻したプラハ市民は、権力に抵抗する信念と行動を力強く世界に示した。その一方で市民の文化と芸術に対する関心と理解も並々ならぬものがある。街を歩いていると目につく伝統のボヘミアン・ガラスと、いずこからともなく流れてくるスメタナの名曲「モルダウ」は人びとの文化への高い関心を思わせてくれる。モーツアルトの「ドン・ジョバンニ」が初演されたのも市内のエステート劇場であったし、初演のウィーンでは不評だった「フィガロの結婚」が、このプラハでは大成功を収めモーツアルトを感激させたと言われている。私には、文化の香高いプラハの街と、他方で激しい動乱の源流となった情熱的なプラハは、そこにいて心豊かにし、勇気とエネルギーを与えてくれる「生きた歴史を教えてくれる世界遺産」のように思える。



カレル橋、チェコ政府観光局の写真、もしこれを利用されるなら上半分だけで良いと思います。